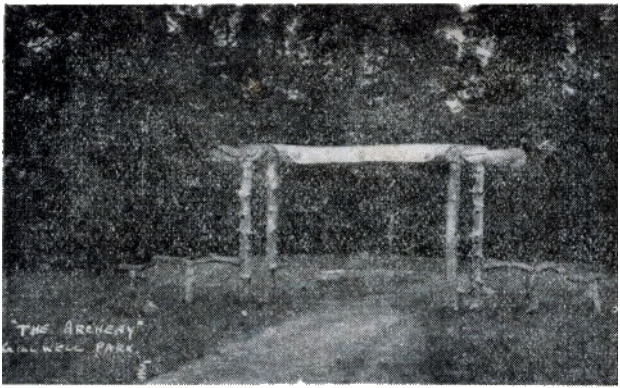
營火の仕方

(附)營火劇集

少年團文庫第三輯



(場火營のルエウルギ)

少年團文庫

營火の仕方

(附)營火劇集

營火の仕方

吉川哲雄

一、營火を待つ心

すべての星は私の身内に輝く樣に感じた　タゴール

待ちに待つたキャンプの夜が來た。木の葉がさやさやと涼しく嘯く毎に、テントの中も木の間も薄暗く、人聲も急に靜まつた。夕闇が迫つて來るのだ。

窒には青い燈を捧げる樣に、キラリ、キラリと星が輝き初めた。

とうとう夜になつたな——

と思ふと、テントの中のランタンに燈がついた。美しい人の影繪、友の顏の

何と崇高く、生々と見える事よ。

暗くなつたぞ。

營火がもうはじまるだらう。

あちらの方で賑かな歌聲が起る。

それを聞くと變に胸がどきどきする。

今夜の營火はどんなだらう早くやつてくれないかなたまらないなあ。……

この營火を待つ氣持位嬉しいことはありませんね。まだ見た事もない森の中の赤い火、パアッと明るく映つてゐる火、さも愉快さうに歌つて行く兄さん達、今に皆んな一つの火のぐるりに集るのだと思ふと眼の中が熱くなる程懐しい氣持がしますね。

樂しいキャンプファイヤー！

キャンプ生活の生命！

私はこれからそのお話をいたしませうね。

二、火

火！

何萬年の昔から、人間はこの火をどんなにあこがれた事でありませう。人間の手で火を焚く事の出來た時、その燃え上る炎を眺めてどんなに、私達の遠い〳〵先祖の人々は喜んだでありませう。その喜びは今でも私達の血の中に波打つてゐるのです。

燃える火をじつとみつめて下さい。いつの間にか頰は赤くなり、息も荒く、躍り上り度い氣持になります。火はこうして私達の身體を暖めるばかりでなく心まで湧き立たせる不思議な力があります。

香はしい密柑の實る南國紀伊の國の高野の山には、千年の昔、開山のお大師さまの燃した火が今も消えずに赤々と燃えつゞけてゐます。こんな話を聞くとなほ神々しさをおぼへますね。

カチリと燧石の火華の飛ぶ美しさ、檜の木をすり合せてゐると、白い煙と一

緒に燃える火の清らかさ、シュッとすつてあたりを明るく照し、燃え細り、頭重げに消え落ちるマッチの火、萬葉歌人が歌ふ野火の赤さ、切り火、お盆の精靈さまの火、鎭守の祭の篝火、夜陣の火、と云つただけでも走馬燈の樣に次から次へと美しい炎が心の中に、ゆらゆらと燃え上つて來るでせう。

人間は遠い昔にこの美しい火を自由にすることが出來ました。そして火を使つて人間の生活に要り用の物を次から次へと作り出し、人間だけが、地上で他の動物の中で一番進んだ文化を持つ樣になりました。そして總ての物を征服しやうとして、人間の限りない望みは常に新しい發見、發明をつゞけてゐます。

然しこの不思議な火は、小さな美しい光を與へてくれると一緒に、燃え上る炎は恐ろしい力となつて、生きる者總てを燒きつくさねばやまない凄さを持つてゐます。大きい火は人間へ戰を挑んで來ます。或時は人間はその火の前に全く力ない弱い者として滅されてしまひます。

私たちの焚く火は、よくよく火のほんとの性質を知つて、その美しさ、その炎の持つ暖かさを喜びの心を持つて燃すべきです。

美しいものはどこまでも、美しくこれを眺め、私達に便利を與へてくれるものは、上手に之を使ふのがほんとのスカウトの氣持です。

無駄なこと、不注意なこと、いゝ加減ないたずら心で火を取扱づてはなりません。

風もない時、すうつと燃え上る火を見てゐると誰れでも神聖な氣持になりますね。神前の燈、み佛に捧げる淡い光は身も心も清めずには置きません。

私達スカウトは聖なる火を燃して、お互の心を、兄弟心を暖め合ひませう。

キャンプ、ファイヤーはこうした心の清めの火であります。

三、夜のヴェール

あたりが薄暗くなつて、月もまだ出ぬ暮れ闇の頃、キャンプで一番心持の落ちつく時です。楽しい夕食をすませて、お腹もゆつたりふくれてゐるし、晝間の疲れが輕るく全身に流れて、身體がすうつと筍の様に伸びる氣持がします。

晝と夜とのスキツチの切り換へ時、激しい活動と安らかな眠りとの移り變り

目に、この快い夕闇の休み時間が來ます。

お話も一寸種切れだ、鍋も食器も片附いた、みんなの幸福さうな顏が並んでゐる。

心が落ち着いて來るに從つて暗くなつたあたりを見ますと、誰れでもきつと今自分の居る野營地がこんなにも美しいところであつたかとはつと氣が附きます。

晝間見をぼへの木がまるで黑い闇をその枝葉から吹き出すのかの樣に、一刻一刻暗くなつて夜のヴェールは地上を覆つてしまひます。

月の出の淡い光が空に漂ふ時分、星がパチリと目を醒ます頃の野營地は、夢にも見た事のない、きれいな土地になります。

ランタンに燈を入れると、光の圓い輪が、土の上に描かれる、テントがたまらなく、暖かさうに見える、薄ら光に照された、木の幹、搖れる木の葉も程よく見えて、何とも云へない美しい情景が描き出される。

繪の下手な人も、詩の作れない人でも、どんな人でも、この夜のキャンプを

見て、繪心を作れなくても、詩の心を湧き立たせない人はありません。

「いゝな――」

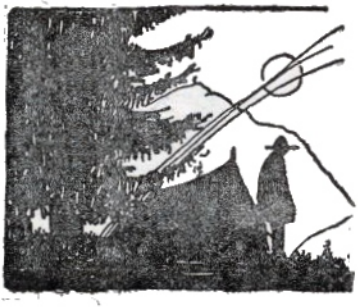
と思はず呼ばずには居られなくなります。

夜はこうして、あたりをすつかり包んでしまつて、いつまでも心の中に忘れられない景色を見せてくれます。

靜かに靜かに夜のキャンプを眺めて下さい、それは神樣がスカウトにそつと見せて下さいます、美しい繪ですから。

四、營火の圓い輪

スカウトのキャンプで大切なのはこの營火です。それは晝間の愉快なスカウト作業の後に、涼しい音樂でも聞く樣に皆んなの心を樂しませキャンプをもう一層樂しかつたと感じさせるか



らです。

そして後になつて眼を閉ぢてみても、赤く燃ゆる火と、その夜の思ひ出が、いつ、どこにゐても、昔のまゝに、いやそれよりももつともつと美しく甦へつて來るからです。

そして、その時にお互の心の中に湧き上つた暖かい心、火のパチパチと燃える響を伴奏にして、いつの程にか生れた仲よく樂しい兄弟の心持が、しつかり結ばれるからです。

友情、

人を愛する心持、

お互に兄弟だと云ふ自覺、

それが生れ出るには、お互の手と手をとり、心と心を近づける、少しの隙もない樣にぴつたりと結び合つて、中心の火に心を暖めるには、どうしても、圓い圓い輪を作つて、お互は結び合つた鎖の一つの環となつて、火を取卷く圓い輪の形に座を占めずには居られません。

ですから營火が大きくとも小さくとも、必ず火を中心に圓座を作るわけは、こうした兄弟の親しみの情が自然にあらはれて出來たものです。

そして、この輪の中の一つの環となる事の出來る人は何といふ幸福でせう。その人は僕達の仲間の人か。

少くともスカウトの心を持つた人であるべきです。

ですからスカウトの營火に招かれて、この圓座の中に加ることは、お互の心を同じくした世界に仲間入りすることです。

これに加れる人はキャンプへ來られたお客樣の中で、一番仕合せな人で、野營の最上のもてなしですから、名譽な事です。またスカウトのこの友愛の輪へ暖かい心の方が加はられる事は僕達の光榮です。

營火は見せ物ではありませんから、ほんとの事を云ひますと見物人が大勢あるのは、お互の氣分も散つて迷惑です。

それで出來るだけ、山や森の靜かなところを選ぶ心持もこの事を考へるとよくわかると思ひます。

然し時と場合とによつて、見物人がある時には、見物人はどこまでも見る人ですから、營火をする我々の邪魔にならない樣に、この友愛の鎖の外側で、我々の妨げをしない樣に靜かに見ていたゞく樣にすれば、ほんとうのスカウトの營火の氣持もよくわかつてもらへます。

そして團から招かれた小數の方々だけは、この圓座の中に加つて共に樂しんでいたゞく樣にはつきりと初めからきめる方が、お互に氣持よく出來ます。

五、營火の種類

(イ)班營火

班長が、隊長の許を受けて、班だけで野營に

行く、その時の自分の班ばかりの、ほんとの水入らずの營火は、お互がしんみり話し合ひ、班長が營火長となつて歌に劇に話に班員が遠慮なく溶け合ひ、班の精神を作る時です。

（ロ）團　營　火

夏休等に團の者皆が集つてする營火は、各班がお互に自分の班の最もいゝところを示し合つて、そして團長や隊長のお話がよく響く團として氣分のしつくり合ふ大切な時です。

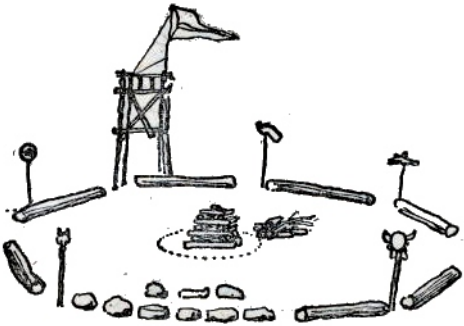
（ハ）巡歷の夜の營火

スカウト作業に熟練した青年健兒が唯一人で、或は二人連れ、三人連れで、輕いハイクテントを背負つて山野を放浪し、何物にも囚へられない自由を憧憬れ、旅より旅への巡歷の夜の小さな營火は、スカウト作業の仕上であり、この時程深く自然の中に身を潜ませる時はありません。

（二）聯合團の營火

地方の聯合團、近所の團との聯合、外國スカウト歡迎の營火は、お互の親し

みの中に、大きいスカウトの兄弟心を、眼の前に見る事が出來、スカウトらしいきびきびした禮儀と規律の中に、樂しく勵み合ひ、良い點優れた點を學び、溫められた友情は、スカウトの團結を強めると共に、僕達仲間が彼方にも、此方にも居る事も知り信頼と力強さを覺えます。



まして全世界のスカウトの集るジャンボリーの營火は世界の兄弟心を養ひます。

六、營火場

野營地を定める時に先づ國旗揭揚の廣場と共に營火場を決定しなければなりません。この二つの場所は共に野營地での神聖な場所です。何故ならばそれは心を養ふ場所であるからです。

營火場をどうして選ぶかと云ひますと、先づ野營地の地勢から見て、出來るならば國旗の廣場と、營火場を別にする方がよろしい。

國旗の廣場は朝の嚴肅な行場です。營火場は夜の樂しい行場であるからです。

然し地形上致し方のない場合には兩方共同じ場所に定めて、常に當番班が清らかに手入をしてをきます。

營火場としては、お互の氣持がしつくり落ち着く爲めには、程よく木立があり、或は山の狹間か、小さな窪地の樣な、小ぢんまりと落着くところで、營火の人數が大體圓座して入り得る空地が理想的です。そして出來るならば野營地の偵察の時に、夜の營火場の感じを現地で調べてもらへば何よりです。

その時、營火の中心である火床の位置と、周圍の地形から見て、その營火場の上の座を營火長の席を作るために考へて置き、夫々一寸木の枝ででもサインをして置く事は斥候らしい氣持のよいあらはれです。

然し平坦な地で、何の變化のないところでは、仕方がありませんから、一本の木でも、一つの叢でも繫みでも、營火長の席の背景に定めて置くのはいゝ工

夫です。

猶その座席に何か附近の木とか石等で座席の作り得るものがあるか、それとも、さんだわら或は疎防水布等を敷くかについては、前から考へて置かねばなりません。濕地はよくありません。

少しの工夫で營火長や幹部の方の椅子になるものを設備するのも當番班の作業です。木の切株、丸太、石、さんだわら等は座席に用ひて氣持のよいものです。

七、火床

營火の中心は、燃ゆる火にあります。それは若者の心にも似た情熱を感じます。暗い夜空に光を與へます。集る者に暖か味を與へます。

その大切な火床は、前にも云ひました樣に、營火場の中心に設けます。唯火を焚くだけの場合であるけれども、若しそこが草原でありますならば、草の根に土のからみ着いた儘で少しく切り取り窪地を作り、草の塊は一方に置いて、

營火が終り、火も消してしまつてから、草と土は前の様に置いて、この土地を荒さぬ用意が必要です。そして眞中に凹みを作りますと、それを取卷いて、石塊を圓形に或は方形に列べて緣どりをするか、或は相當太い木を以つて、四角に木の枠を組み、火床の位置をはつきり定めます。

營火の席が、圓座でありますから、この火床はその中心の位置を定め、營火長の席は、その圓周上に上席をきめる事です。こうして自然に營火のきまりが着きます。

スカウトの生活にはいつも自然な規律が要ります。

八、營火の係

營火を樂しくするには、營火に參加するスカウトの總てが、協同する心持がなくてはうまく出來ません。そしてこの營火を規律正しくするには次の四つの係が必要です。

第一は營火長です。その野營の一番長上の方がなります。そして營火の總指

揮であり、總てのスカウトは營火長の指揮をよく守つて立派に營火を仕上げなければなりません。營火長がどつしり落ち着いてゐて、そして、朗らかな氣持で指圖をすると、營火長の氣分が總てのスカウトに響きます。

第二はエールマスターです。營火長がどつしりと落ち着いた山であれば、この係は山より出でゝ流るゝ川の樣に、歌の上手なエールのうまい、そして全體の者の氣持を察する敏感さと、音樂の巧みな指揮法、輕快な動作の人がこの係になります。或時は山間の急流の樣に、激しい元氣のある指揮をします。又或時は平原を流れる川の樣に緩やかに歌も歌へると云ふ風に、營火長と全員の氣分を無言の中に察して營火を指揮する人です。

第三はプログラム係、これは大抵の時は當番班長がなります。この係は營火の三十分前位迄に、各班から、營火の出しものの申出を集めて、その性質をよく案配して營火のプログラムを作り、營火長に提出します。營火の時に出演者の種目と班名をアナウンスすることもあります。

第四は焚火係です。これは當番班がする事もあり、又特に老練なスカウトを

指命してこの係にする事もあります。その理由は營火の火の焚き方は、營火の氣分によつて強くも弱くも焚かねばならないからです。

日の暮れる前に營火に十分な薪を集め一ヶ所に整頓し、火床の濕りのない樣にし、火のよく燃え付く樣に用意をし、萬一燃えないと困りますから小さな蠟燭を用意してゐる等、細かい注意が大切です。又、火を消す爲めにショベル及水の用意をし、最後にはこの係の者は、完全に火種のなくなるまで消す責任があります。

このエールマスター、プログラム係、焚火係の三つの係が營火長の心持のまゝに、よくその氣持を察して營火を巧みに動かして行くのです。

大きい營火では勿論、營火長の外に副營火長が必要です。そして營火の時出演の種目と團の名又は班の名を呼ぶのが普通で、時には出演者の名も云ふ事があります。

九、營火の氣分

營火の氣分！

これが營火には何より大切な事です。これはそこに集つたスカウトが、ほんとのスカウトである修業がよく積めて居れば居る程、しんみりとした親しさと火の樣な元氣と、朗らかな笑の湧き出る洗錬された演技と、凉しい歌聲が生れ出ます。

營火は生き生きとしたスカウトの心持の流れですから、自然とリズムを打つてゐます。丁度歌の樣に或時は高く、或時は低く、然し全體としてその夜の營火獨特の一つの氣持が流れてゐます。

又能樂の演出にむづかしいきまりがありますが然しその爲めにキチンとして亂されずよい心持で終る樣にやり度いものです。

營火の大體のリズムを云ひますと、

靜い　靜
動
靜い

と云ふ形です。始めは靜かに初めて、中程ではうんと元氣よく、面白く、おかしく、さて終りには、また靜かに營火を終ると云ふやり方です。

然し演出のプログラムによつてこの中にもまた靜、動、の小さな變化が生れます。そこでプログラムを作る係が、靜かな歌の後には、賑やかな劇を入れるとか、少し騷ぎ過ぎると思はれると次にお話を入れて落ち着かせると云ふ風に工夫が必要です。

又エールマスターがどうもプログラムのまゝでは元氣が出ないとか、或は少し亂れさうになるとかと感じますと、すぐ臨時に夫々賑かな歌とか、又靜かな口笛を入れるとかの工夫も出來ます。

そしてグングン氣分が上つて來たのを、次第に靜かに落ち着かせて、最後には咳一つ洩れない位に靜かに靜かに火の消えて行くのを皆が眺める程の緊張に導き入れそして別れを告げると云ふ風にするのが最もよろしい。

ですからエールマスターは音樂の氣分をつかんでゐる人でありますと、この營火のリズムを上手に導いて行く事が出來ます。

それですから焚火係も、皆の元氣が高まれば、火を盛んに燃やし、靜かに落ち着く時は薪を加へるのを少くするか、或は一時中止して火勢の靜まるのを待ちます。初の内こそ火の燃える勢と、全員の氣合とが合ひませんけれども、暫くエールマスターに導かれてゐるうちには、火と人の氣合とがうまく合ふものです。こうなつて來ると營火は益々面白さが增して來ます。

最後に靜かに納めると云ふのは、あまり元氣にまかせてやり過ぎますとどうしても亂れて來ます。

亂れた營火はスカウトの營火ではありません。又スカウトは常に自ら自分の身體を引しめ得るんでなければなりませんから、うんと調子を上げつぱなして營火を終りますと、野營で大切な夜の睡眠時間を狂はせます。消燈の角笛が鳴つても、まだ冷め切らぬ亂調子から、話をしたり、歌を歌い續けたりする樣になります。こうなつては自分の爲にも人の爲にもよくはありません。それでどんなに愉快で面白く油が乘つて來ても、終りには靜かに落着いて營火を終る樣にしたいものです。

何事にも八分目と云ふのが一番味の多いところです。營火ももう少し騷ぎ度いと云ふ九分位まで行つて少し希望を殘して終ることは次の營火を樂しくします。

營火はその樂しみを味ふ事が大切です。

一〇、プログラムの作り方

靜かな中にも、喜びが滿ちてゐる。賑やかな騷ぎの次には、カッキリ靜けさが流れ出る、そんな氣合の滿ちた全員の心持の緊張し切つた營火は、優れた音樂を聞く樣です。そして音樂の時よりもつと生きてゐる力が感ぜられます。

そのプログラムを如何に定めるか、それは先づ當番班長の苦心すべき點で、各班から申出での演技の種目と、それがどんなことをやるのか何分かゝるか準備の都合を大體問ね知つて置く事

が必要です。

そして優れたものを終の方に置くのは誰も感ずる事でせう。然し最初の切り出しは餘程注意が必要です。

最初にピタツと全員の氣合が合ふと、その營火は非常にやり易くなります。

それには時間を嚴守して、全員が待ち兼ねる程の熱があり、營火長はじめ一同着席し、そしてプログラムの第一はどうしても皆の氣分の合ふ樣なもの、歌の合唱とが場合によつては、掟の朗誦もよろしい。そして歌の次には何か動きのあるもの例へば劇とか、物眞似とか對話の樣なものを置き、少し堅くなるかと思はれる時には、又歌を交へる樣に組立て、最後になるにつれて次第に優れた演技を入れる樣考へるべきです。勿論營火の演技は二分或は三分間程度のもので、五分以上と云ふのは餘程特別の場合の外は、演出しても見る方で疲れます。それで時間の事も十分考慮して、營火全體に要する時間も一時間乃至一時間半程度が最もよろしい。そして推行に無駄な時間のない樣にするのは、エールマスターの指揮と、アナウンスの敏活と出演者の準備の周到とによります。

プログラムを一度定めると全く動きのつかぬものであると考へては困ります。準備の都合や、思ひがけぬ事情の爲多少の變更は起つて來ます。そんなときに際のない樣に努めます。

そして營火全體の氣分の上から、エールマスターが歌を合唱したり、輪唱したり、全員でエールをやつたり、簡單なゲームをしたり、話の續きの廻り持ちのお話をしたり、皆一齊に、律動運動をしたり、舞踊を入れる等いろいろの工夫が加へられますからこれも考への中に入れて置いて行ふと、息もつげぬ樣に次々と、すらすら演技が續いて實に氣持のよいものです。

一一、演　技

どんな出し物をしやうかと、營火の時にはいつも班員が額を集めて考へますね。

演技は班を單位にしてするものである事を忘れないで下さい。誰か素的に上手なハーモニカの獨奏をしたとしても、それは班を代表して出てゐるのです。

又團が幾つも聯合してする場合には、團が單位になります。勿論團に幾つも隊がありますその隊を代表するものです。

それから演技は見せ様、聞かせ様とばかり考へてしまつたと、折角の演技も賤しくなります。自分の班の班員が皆よつてすると云ふ事を根本に考へて置いて下さい。そして班員一人一人夫々得意の點があるものです、歌がうまいとか、お話がうまいとか、眞似がとても上手だとか、何にも出來ないけれどパンの樣に肥つてにこにこしてゐるとか、夫々生れつきのいゝ所を持つてゐます。それでそれらのいゝ處を集めて、皆で協同のものを作り出すところに營火の演技としてよくやつたなと云ふスカウトらしい感動が起るのです。

それが普通の餘興會と少しちがつてゐるところです。

次に演ずる題材を町中の生活にとるよりは、出來るだけ自然の生活のものをとつてほしい事です。切角山や森へ來てゐるのですからモダンボーイの出る演技よりは熊や狸の出るものゝ方が面白く思はれます。又假裝するにしても、そこらに有り合せのものを利用して、一寸手輕に形だけつけて、『……になつたつ

もり』で後は動作や言葉であらはせばよろしい。

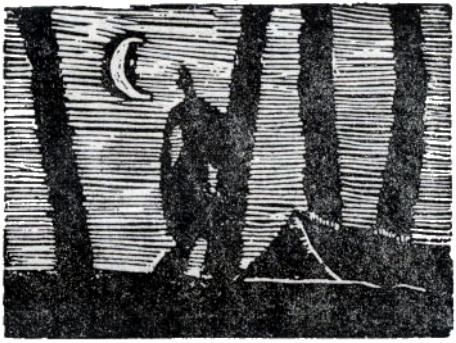
昔の武士道物語とか、傳說をやつてみるとかするとほんとうにぴつたりその場に合ふ事があります。

營火では今まで度々云ふ樣に歌は大變重く用ひられます。それも素的にうまく歌はねばならぬと思ふと堅くなつて歌へなくなりますから、樂に歌ふ樣にすればよろしい。班で歌を十曲出しく歌へる樣になつて居ますと、營火は大變賑かになります。それも歌ひ慣れた歌、皆の知つてゐる歌であつてよろしいのです。

新曲ばかりあせらないでもよろしい、そしていゝ歌は皆に愛されいつまでも誰れにでも歌はれるものです。いゝ歌は何度繰返してもいゝものです。また、全員が合唱する位氣持のいゝ事はありません。

森の小鳥の樣に朗らかな歌の歌へる樣練習してゐて下さい。默つた唇のスカウトの樣なのが營火の輪のどこかにゐると、まるで齒が拔けてゐる樣で、氣勢が上りません。

健兒唱歌だけは練習してをいて下さい。



歌と一緒に營火に用ひられる樂器として、子供らしい樂器がよい樣に思はれます。平素吹きなれてゐる、ハーモニカとか笛とかオカリナとか絃のある樂器ではウクレレ等もよく合ひます。樂器とは云へないかも知れませんが、笹笛、麥笛も懷しい音を立てます。

その他使ひ方によつては鍋の樣な炊事道具も面白さがあります。

聲樂の進んでゐるスカウトでありますればドイツのスカウトの樣にギターを伴奏にして歌ふ事も出來れば試みたいものです。然し何といつても聲樂は喉一つで歌へるのですから、一番入り易くて、

やればいくらでも深味のあるものです。
寸劇、無言劇、對話も、よくまとまつてゐるのはやる人にも見る人にも愉快です。

次にお話ですが、營火夜話と申しまして、火をとろとろと焚し乍らお話を聞く位樂しい事はありません。營火夜話として英雄傳、冒險談、忠孝美談、愛國美談、童話等、特に我々の先祖の優れた物語を聞きますと、自分もその昔の山や野に駈けまはつてゐる人の樣な氣持になります。又、團長やら、營火に招かれたお客樣から、奮鬪實話や自ら感激したお話や、自分のやつてみた獵の話の樣な實話は、それを試みた御本人から聞くだけに熱が湧いて來て、深い感激に打たれるものです。

營火夜話は、簡單で力强く、むやみに長く伸びるのは退屈しますから、一言一言胸に迫る樣な誠實のあふれたお話は最も適してゐます。

物眞似も、思はず笑はせられます。動物の鳴聲の競爭も場所が場所ですからよく合ひます。全員が樂しめる樣なゲームもよろしい。

然しお互に如何に上手にやらうかと工夫をこらしてするのはよろしいが、決して他の班とむやみに競爭してせり合ふためにするのではありません。見弟らしい氣持で、お互の良いところを見せ合ひ、見合つて勵むのです。上手下手を決定するのではありません。

樂しむのである事を忘れないで下さい。

一二、服　裝

營火にはどんな服裝がよいかを話しませう。一體野營の時は、朝の點檢以外は短ズボン一つで、成るべく目光浴をして、眞黑になる方がよいのであります。生白いスカウトなんか見ても強さうではありませんね。

唯、特に團長から命ぜられた時とか、野營地外へハイキングや傳令等で出かける時は正裝しなければなりません。

それですから、營火の時の服裝は自由でありますが、野外の夜は何と云つても涼しいからこの注意が要ります。あまり見苦しい服裝さへしなければいゝの

です。

ネツカチーフを頭に卷きつけたり、毛布をかぶつて出て來たりすると、山賊の群か、山の修行僧かと思はれます。これ等も一層營火の氣分を面白くします。又平素丹精した手作りのインデアンの、外套なんか着て出るのも自慢でもあり愉快です。

一三、營火の作法

營火の御行儀を少し話しませう。これはスカウトの禮儀正しい、規律のあることを示す機會ですから話してみませう。

營火の時間を嚴守して、その時刻より五分前位に營火場に行き、夫々係の指圖を受けて定まつた席に着くこと、よく準備に追はれたり、夕食の後始末の爲遲れたりします。これは是非定刻までに行つて、着席してゐなければなりません。

當夜の指揮者は營火長でありますから、定刻になつて營火長が來られました

ら、直ちに「氣を附け」の姿勢を取り、營火長並に營火長の案内して來られる來賓に敬意を表し、敬禮をします。そして營火長の身振又は指圖によつて、着席します。

次に副野營長或はプログラム係から出演を呼ばれますと、直ちに活潑に出演の準備をして元氣よくやります。

見てゐる者は靜粛に、お互に熱心に演技を見ます。決して途中で批判したりうまいとか下手だとか私語するのはスカウトらしくありません。勿論彌次つたりすることは禁ぜられてゐます。

若し演技が下手でも、やる人々の努力を見て上げて下さい。若し非常に上手であれば、その優れたところをよくよく見て下さい。

あまり輕はずみに、むやみに拍手したりしますと、折角やつてゐる方の人の心持を搔き亂したりします。

拍手は野球の應援ではありませんから、思はず拍手をしたくなつた時は「急霰の樣に」と云ふ樣に强いが短かい拍手にして、スカウトの眼を開いて見る事

に氣をつけて下さい。

スカウトの集りですから、挨を朗誦するとか、御皇室に關しますお話があります場合には、直ちに油斷なく起立して、謹む心を忘れないで下さい。

團歌を合唱する場合も同樣であります。こゝ時、服裝はそのまゝでも敬意を失はない樣に嚴肅な「氣を附け」を致します。頭のかぶり物も出來るならば取つて、心の底から合唱いたしませう。

營火の終りは必ず嚴肅な氣分で終るものである事を心得てゐて下さい。どんなに面白く思つても終りになりますと、落着いて靜かに樂しい營火を終る氣分になつて下さい。

その營火が愉快であればある程、終りを綺麗にして、美しい思ひ出を殘しませう。

演技の途中は營火長とエールマスターによく注意し、一つ心になつて樂しむのです。

自分の演出する時は元氣よく力一杯で「最善」を盡すのがスカウトです。

最後には「お休みなさい」とお互に挨拶を交はして、自分の天幕に歸り、消燈の角笛がなりましたら、どんな事があつても、直ちに默つて眠りに就く樣にして下さい。

一四、儀式

營火に何か儀式を入れる試みは、アメリカ等では、インデアンの點火式をする樣です。

一般には特別に儀式めいた事はしません。

營火は營火長の挨拶と全員の敬禮により開かれ、最後に營火長の訓示、挨拶により終ります。

唯、我々スカウトは、何時、如何なる場合でも誓を忘れてはなりません。特に神明と御皇室に對する尊崇の心持は最も大切であります。

樂しい營火の出來ました原因を靜かに考へますならば、神の御恩、大君の御恩、國の御恩、親の御恩を片時も忘れられません。常に感謝の心を持ち、それに平素の實行によつて御酬ひする決心を持たねばなりません。

それで謹んで、國歌を合唱して君國を思ひ、靜かに默想して我身にふりそゝがれし御恩の深さを思ひ、消え樣とする火を前にして靜かに自分の心一つを澄み淸めて、神佛の御心を感じなければなりません。

これ以外に點火の時、或は營火の終りにその時々に應じ簡單な儀式をせられる事は團長及全員の心持次第であります。

例へば明日は海山遠く互に別れ行くと云ふ樣な別離の營火では、最後にお互の手と手を堅く握り合つて、別れの歌を合唱する等は、思はず涙が頰を濡らす事がありました。

一五、飲み物、食べ物

營火の時に何か飲み物や、食べ物を出すかどうか。

これは班、或は團だけの樣に最も親しい間柄だけでやる場合に、營火の途中で一寸何か食べたり、飲んだりする事が大變嬉しく氣分を爽かにする事があります。幼年健兒の營火等では何か與へた方がよろしい。

大きい營火では、そんな事をして居れませんから致さないのが普通です。然し營火を終りますと、喉を乾かせたり、食慾の盛んな連中は、火の燃えるのを見てゐたゞけでも、腹が空く方もありますから、各班の炊事當番の夕食の殘り火を巧に利用して、お茶をわかせて置くなり、極く小量の食物を工夫して置くなど仲々頭のいゝところを見せて下さい。

一六、後始末

營火が終り夫々愉快に天幕へ引上げますと、焚火係は、火床の殘りの燃え木を掻き擴げて、十分燃えさせます。その後火種が少しもない樣水を打ち、よく集め

て埋めてしまひ火氣の全くなくなるのを見屆けてから引上げます。

この殘り火を燃してゐる何分間かは、よく指導者達の會議や愉快なお話をし合ふ時間となります。

實際營火の終つた後の數分間はいゝ機會です。

一七、雨の營火

キヤンプに來て期待してゐた營火が、雨の爲に中止になつた時は、ほんとにガツカリします。失望したからと云つて天幕の中でゴロゴロ横になつても眠るには早く、眼が冴えてたまりません。

こんな困つた時でも、口笛を吹いてニツコリ笑つて面白い工夫の出來る樣になり度いものですね。

こんな方法もあります。それは天幕の中で他の班の人を招待して、ランタンを營火の火の心持で天幕内の營火をするのも面白い事です。一つの天幕に二ケ班入れぬと云ふのであれば、班が半分にわかれて、お互に交り合つて入ると、

これ又一つの面白さがあります。何でも工夫が第一です。

一八、室内營火

野營季節も終つた晩秋から冬の夜、夏のキャンプの樂しさを忘れかねてゐる頃には、室内營火がふさはしい。

室内に丸太の枠を組み火床をよろしく作り、枯枝や薪を積み重ね、電燈のコードを長く引つぱつて來て、電球一個を、赤い布を覆せて、火床の下に潜ばせスキッチを捻れば、ぽつと赤く營火場が出來るといふ仕組は、その頃の夜の集會を十分樂しませる。

お互に營火の心持で營火長以下の係も作り狹いけれど、室内營火はまた別の親しみを感じさせます。

一九、ギルウヱルの營火場

英國ロンドン郊外のギルウヱル實修所の營火場は、スカウト野營地の片隅、

樫の木の繁みに包まれた一角で、常設の營火場です。その入口には、奇怪な繪文字を刻みつけた、クジイウニイクの門が作られてあります。

營火場内には、太い材木を以て火床の枠を組み、これを圍んで木材が閉く座席を作り、その外周は、土を小高く盛り上げて、集る者の多い時の用意がしてあります。正面にはエビングの森の鹿の頭骨を飾つたトーテムポールがあり、その根もとには健康をあらはす蛇が卷き上つてゐる見事な彫刻があります。

この廣からぬ營火場はイギリスのスカウトばかりでなく、殆んど全世界のスカウトが訪れては營火を樂しみました。毎土曜の夜には、赤々と火が燃え、スカウトが營火を樂しんでゐます。

火床から振り返つてゐると、彼の入口の門柱の横木には、强く强く短い文字が刻まれてゐました。私は近よつて、よくよく判じ讀みますと、そこにはこんな文句が刻まれてゐました。

よき火はまどひを暖むるが如く、
我等の理想はこの世界を暖めん。

キャンプの夜

キャンプに靜かな夜が來た。

星は靑くまたゝく、
テントの灯影は淡い、
さあ兄弟たち、
篝火を焚かうではないか

これはスカウトのキャンプで、毎夜の樣にすらゝと滲み出る感情の流れです。これは決して策略でもなく、また健兒訓練の慣習的な儀禮でもありません。

神秘な夜の黑いヴェールに包まれる時、多感な少年靑年達はじつとお互の心を近づけ樣とするのです。そして原始の人人が長い夜を守るために赤い火を焚いた樣に、も

しスカウトがほんとうに、大自然に素直に隨順して行く生活をしますとき、我々の血の内に湧立つ、祖先の強いあこがれが、この篝火となつて表現されるのではあるまいか。

潮の様に湧き出る力——

これを逃してはボーイスカウトの教育は出來ません。

ひし〳〵と迫る夜の力に、健兒達はお互にしつかり手を握りたくなるのです。また、赤い熾んな火のまはりに、だまつてゐても、圓陣をつくり度くなるのです。おゝ、この夜の持つ魅力を我々は見逃していゝでせうか。

我々は、術や手段で、健兒達が弄ぶことを恥ぢます。そして、反對に自然の待つ大きい力、——啓示の——中に身を投げ出さねばならないと思ひます。より素直な、謙虚な心で暮す時、この教育法のみの持つ特異な效果が現れます。

原始の昔、我々の祖先たちは、火を得るためにどれ程の苦しみをしたことでせう。それを自由に燃し得た時のよろこびはどんなでしたでせう。私達のキャンプファイヤーも、しみじみこの祖先の心持からつゝましい心持で、火を焚か

うではありませんか。もし兄弟達の氣分がぴつたり合つてゐます時、このつゝましい心を表はすにふさはしい、素朴な儀式が創り出されます。

さらに赤々と闇室に燃え上る火は「青春の歡喜」そのものの象徴ではありませんか。パチパチと燃える音を聞いてゐてさへ、我々の鼓動は粗くなるではありませんか、火を凝視するスカウト達の姿を見ると、火は力強く健兒達の魂を吸ひつけてゐると云ふことが出來ます。即ち多くの魂が、この中心の火に確實に握られてゐる爲めに、こゝに合唱が生れかがり火の物語が耳底にいつまでもなつかしく殘り、篝火の長の聲が凛と響くのです。

熾んな火は力の酵素です。こゝに舞踏が生れ、叫聲が、哄笑が爆發しその刹那我もなく人もなく、兄弟の心はぴつたり融け合ふのです。

こゝに單純な、力強い、自由な、スカウトの藝術を生む母胎となるのです。

まことに心の響き合つた驚きのないキャンプファイヤーは淋しいものです。然しまた薬末の戯きをも、星の靜かな歩みをも感じられる程の靜寂さのないのはより淋しいものです。

キャンプファイヤーは決して、冷やかな計畫通りのものであつてはならぬ。火と、篝火の長と、スカウト達と、この三つの氣分によつて醸成される力の流れです。こゝにチーフの苦心が必要なのです。迫り來るこの氣分を洞察し、それをよりよきものにするところに、指導者の鋭い目が入用です。

キャンプファイヤーは眞似の出來ぬものです。

それはお互の素裸の心持が出るからです。何等の飾りなき生地そのまゝが出る時であるからです。

眞に深い精進が要ることがわかります。深い信念なくして、どうして篝火のつどひに流れる宗教味を强められるのでせうか。騷ぎ靜寂の後にかつきり來る祈りたい心持、天地の靈に感謝したい心持を深めるのは、篝火の長の信念ではありませんか。

私はキャンプファイヤーはどこまでも聖なる火であつてほしいと思ひます。

華やかな篝火のつどひ、これがキャンプの夜の總てではありません。

天幕に降りそゝぐ雨の音を聞く夜、蠟燭の灯影に浮ぶ兄弟の目には、どんなにかしみじみとした懐しさを持つ事でせう。

或は打ちとけた、小さい仲間の篝火は――巡歴の夜の青年健兒の焚く火は――如何ばかり静かに天地の寂を味へることでせう。

私は望みます、どうかキャンプの夜の神秘を、そのまゝに、ごく素直にうけ入れて下さい。――いや、この夜の魅力にその身を沈めて下さい。

晝、夜、――暗、明、の宇宙の旋律そのまゝに生活することが、ほんとうのキャンパーの生活であると信じます。

單調な生活――大いなる力に信頼し切つた、嬰兒の樣な生活は、まさにキャンプの夜にあると思ひます。

私達は撒きちる星空の下にねむりませう。私達は草の匂の爽やかな大地にその身を休めませう。森の梟の聲は、遙かな幽暗の世界の感覺をさゝやきます。

キャンプの夜にのみ味ひ得る懐しい闇黑は、

天地の靈と、小さい我との唯一の冥合の道場です。我々はこの結緣すべき、

尊い時機を失つてはならぬ。宇宙の靈と、我との、一重の黑い面覆をかるくはずすことの出來るのは、それはキャンプの夜を除いては得られないと信じます。

營火劇集

若宮正

こゝに集めたものは、營火の劇の一班一幕を基本としたものゝ一つの型であつて、健兒諸君にヒントを與え、創作の世界を殘すために、ただ筋書を示すものである。その時、その場所、その人によつて種々工夫されるがよい。無音、音響、或は發聲劇とするもよからう。

一、天の岩戸

準備　グランドシート、携帶天幕、毛布等にて岩をつくり、二人位で岩の兩端を引張つてゐる。神樣は笹、草、枝等にて適當に扮裝、長ズボンをはき、劍をつける。大神樣は白い上衣、他は黑、カーキ色等の上衣がよい。

あら筋　暗黒の中で神様の許定があり、舞踊がはじまる。あまりのにぎはしさに岩の間から懐中電燈の光りがもれ、手力男命が岩をひらいて、大神様を岩の外におさそひ申す。始め營火は暗く、此の時急にあかるくする。鶏の聲聞え、神様はそろつて「いやさか」を唱へる。

二、ヤマタノオロチ

準備　毛布、草葉を利用してオロチに一人扮する。村人扮裝適宜、スサノヲノミコトは健兒服で長ズボン、劍をつける。

あら筋　村人泣いてゐる所へ命がおとほりになり、オロチの出ることをきゝ「助けてやらう」と仰せられる。そして酒樽（炊事用鍋又は釜にてよし）をもつてくる樣にいゝつけられ、村人を去らしめ、命は木蔭にかくれてゐる。やがてオロチあらはれ酒をのみ醉ふてねむるのを待ち、命はこれを平げ、尾の方から寶劍が出る。村人おそる〳〵あらはれ命にお禮の言葉を申上げてひれ伏す。

三、因幡の白兎

準備　健兒一人は白い上衣、耳を白い紙又は大根等にてつくり鉢巻でしめる。他は毛布をかむつてワニになる。

あら筋　兎とワニ一疋とが仲間の多いことで自慢しあひ、ワニが仲間をよんでくる。兎は數をかぞへるといつてその背をわたつて向ふ岸につかうとして、最後に「こちらの岸へきたいのでお前だちをだましたのだ。ワニの馬鹿！」といつたので、ワニがおこつて白兎にくひつく。

四、大熊星と小熊星

準備　アルカスは木の枝で弓と矢をつくり質素な獵師の格好に扮し、母のカリストーはグランドシート又は毛布で熊になる。他はヂユピター王とその從者になる。

あら筋　アルカスは母が熊となつてゐるのをしらずに弓をひかうとする。

それを見てヂユピター王は可愛さうに思ひ、天にあげてカリストーは大熊座、アルカスは小熊座にしようといふ。（ジャンボリー昭和八年三月號參照）

五、熊襲征伐

準備　尊は健兒服、長ズボンにて短劍をもち、毛布をかむる。熊襲梟帥は毛布グランドシートをもつてがつちりさせる。他は梟帥の家來となり、がつちりと毛布等で扮裝する。

あら筋　熊襲梟帥の酒に醉ふのを見計らつて、尊が梟帥を殺さうとすると、梟帥は「ヤマトタケル」の御名をさし上げる。梟帥の家來はあはてふためいて尊の家來となる。

六、野見宿彌

準備　一同健兒服、長ズボン、身體の大きいものが、タイマノケハヤになる。

あら筋　タイマノケハヤと相撲をとると片つぱしからなげとばされるので、

ケハヤは一人で威張つてゐる。そこでさつきからだまつて笑つてゐた宿彌が立ち上つて、ケハヤと組もうとする。人々のとめるのもきかずに宿彌は四つに組んでケハヤをなげとばし、一同歡呼の聲をあげる。

七、和氣清麻呂

準備　正面に御簾が（竹又は枝等にてあらくあんでつくる一枚にてよし）かゝつてゐる。清麻呂は健兒服に長ズボンをはき劍をさげ、飯盒の蓋を冠とする。道鏡は毛布で衣のやうにみせる。天子樣はグランドシートで御衣をつくり飯盒を冠とする。他は群臣となる。

あら筋　はじめ清麻呂と道鏡とが二人で話しあつてゐる。道鏡は「自分に都合のよい事を申上げればお前をえらく用ひてやるし、若し自分に不都合な事を申上げたら島流しだぞ。」とおどかす。清麻呂はだまつてゐる。やがて群臣あらはれ　天子樣の出御あり御簾があがる。道鏡は眼でさかんに清麻呂をけんせいする。清麻呂は堂々と「開闢以來君臣の分定まれり、天位をうかがふものはの

ぞくべし。」と宇佐八幡宮の神勅を言上する　天子様は入御され御簾が下りた後道鏡は目をむいていかり、「清麻呂は色々不都合なことがあるから別部穢麻呂と名をかへ島流しにする。」といふ。清麻呂は「正しいことはいつの日にかわかる私はこれから島流しになりませう。」と笑つて答へる。

八、調伊企儺

準備　健兒服、長ズボン、毛布、グランドシート等にて適宜扮装、一人は伊企儺、一人は新羅王、他は新羅王の家來となる。

あら筋　新羅王の前にしばつて引出された調伊企儺に向つて、新羅王は「日本の方に向つてわが尻をくらへといへば罪を許してやる。」といふ、伊企儺は笑つて「おれは日本人だ。そんな事は口がさけても言へぬ。新羅王わが尻をくらへ。」と叫ぶ。新羅王が憤怒すると、伊企儺カラ〳〵と笑ふ。

九、韓信の胯くぐり

準備 扮裝は適宜、韓信は背に劍をつけてゐる。他は不良のやうな不揃な扮裝でよし。

あら筋 韓信の歩いて行くのを、街の不良がよびとめて「大きな顔をするなその劍はなにをするんだ。」とひやかす。韓信は腹がたつたがよく我慢する。すると不良は「胯をくぐれば勘忍してやる。でなければ、その劍を抜いてみろ。」といふ。韓信はだまつて胯をくぐる。不良罵笑しつゝ去る。韓信は「今に立派になつてみかへしてやるぞ。」とひとり言をいふ。

一〇、司馬溫公の甕割り

準備 扮裝は適宜、木の枝又は棚杖をもつて甕の骨ぐみをつくり、グランドシート又は毛布をもつてつゝむ。

あら筋 一同じやんけんして鬼ごつこを始める。一人が甕の中におちる。一同鬼ごつこをやめて集つてくる。どうすればよいと色々頭をひねるがこまつてゐると、溫公は大きな石をもつて來て甕にぶつつけると、甕の底から落ちた子

供が頭を出し、一同之を救け出し喜び合ふ。

一一、養老の瀧

準備 一人は携帶天幕をひろげてもち、左右にすこし動してゐて瀧にみせ、その陰に他の一人は木の枝をもつて立つてゐる。孝子は腰に飯盒或は醬油瓶をさげ、ネツカチーフで頭巾をつくる。はじめは粗朶をのせる背板を背負つてゐて、斧等をもつてゐる。老爺はネツカチーフで頭巾をかむる。

あら筋 孝子が山から下りて瀧の所で一ぷくして水をくみ酒が流れてをるので驚く。すぐに我が家へかへり粗朶をおろし、老爺を背負つてくる。村人その後を追つて來て驚嘆し孝行の德をたゝへる。

一二、五條の大橋

準備 鍋、飯盒、鉞、ショベル等をいれたリユツクサツクを背負ひ、毛布で身をかためチツカチーフの頭巾に、グランドシートのけさを身にまとふ大男の辨

慶。適當に髷をつけ、グランドシートの袴をつけた牛若丸。其他は通行人となる。薙刀、太刀は適當につくること。

あら筋 通行人を襲ふて千本の刀剣をあつめようと願をかけた辨慶がいよいよ千人目に牛若丸に出會ひ負けて家來となる。

一三、安宅關

準備 富樫は飯盒の蓋の冠をつけ、毛布又はグランドシートで衣裳をつくる富樫の家來二名關所の前に團杖をもつて立つ。義經は木の枝又は竹等でつくつた笠をもつ、辨慶始め從者はリュックサックを背負ひ、グランドシート、ネッカチーフ等を衣にする。

あら筋 山伏の一行が安宅の關を通らうとすると富樫がよびとめて詮議し、辨慶が勸進帳をよみあげると、富樫は「從者の一人が怪しい、鎌倉から達示のある義經に似てゐる」といふので辨慶は義經を金剛杖(團杖)で打つ。富樫は一行の苦心を見・義經であることを知りながら關所を通す。關所を出てから辨慶

が主人を打つたことを義經にあやまる。

一四、櫻井の驛

準備 ネツカチーフ、毛布、グランドシート等をもつて、直衣等をつくる。正成、正行二人以外は家來となる．よろひは俵を利用するか、草を織つた莚でつくろこと。

あら筋 正成が子正行に「獅子は仔を生み三日にして谷におとす」の諺をいひきかせ「自分に代つて大君に忠義をつくせ」といつて短刀を渡し、正行を故郷にかへす。（青葉しげる櫻井……の歌を蔭で合唱するもよい）

一五、兒島高德

準備 笠、簑、適宜、高德の他は警護の侍となる。よろひは前同樣にする。

あら筋 警護の侍一しきり左往右往して警戒してゐるが、段々靜まる。高德あらはれて櫻の木に二行の詩をかいて遙拜して去る。劍舞をとりいれてもよい

一六、曾我兄弟

準備　ネツカチーフ、グランドシート、毛布等にて扮裝適宜、木の枝又は竹をたばねて先の方に懐中電燈をいれて炬火をつくる。飯盒の蓋を冠り短いローブにて顎下でしばる。

あら筋　五郎十郎が炬火をもつて忍び込み父の仇を討ち、亂戰遂に十郎は斃れ、五郎は生捕られる。

一七、いざ鎌倉

準備　グランドシート、毛布等にて時頼及從者は僧侶となり、笠は適當に木の枝をまるめるか又は竹等にて簡單につくる。佐野源左衛門はネツカチーフで鬚をつくり粗末な身なり、他は雪になやむ旅人となる。

あら筋　旅人が「めづらしい大雪だ」といつて困難さうにあるいて行く。やゝしばし僧侶二人道にまよひ、すでに日暮、佐野源左衛門の所による。一宿を

乞うて通され、色々と身上話をしてゐると薪がなくなり、大切な松竹梅の三つの鉢の木を焚してしまひ、いざ鎌倉といふ時は「やせ馬に鞭打ち、さびたりといへど槍とつて……」と源左衛門は大いに氣慨を示す。僧侶大いに感謝して去る。

（若し二幕に出來たら、鎌倉における時頼の國家總動員をやり、源左衛門に恩賞を與へるのも劇としては面白い）

一八、青　砥　藤　綱

準備　藤綱は、グランドシート、携帶テント等にて適當に扮裝、飯盒の蓋の冠がよい。炬火を枯枝でつくり、先に懐中電燈を入れる。他は村人になる。

あら筋　一文の錢を川におとした藤綱が多くの村人をよんで來る。村人は川に入つて一文の錢をさがす。やつと一文の錢をひろひ、天下の通寶を大切にした。

一九、毛利元就と三本の矢

準備 毛布にくるまつてねてゐる元就、傍に脇息あり、元就は鉢巻してゐる三人の子はグランドシートで着物を裝ひ、飯盒の蓋をかむり、短い紐でむすび顎下でしばる。

三本の木の枝で矢をつくつておく。

あら筋 病氣の元就が三子を床の側によび、一本の矢は折れるが、三本の矢は折れぬ兄弟力を合せて行けとさとし、三人の兄弟が平伏して將來の結束をちかふ。

二〇、鳥居勝商

準備 しばりつけられた勝商、他は床几に腰をおろした一人の大將、及その部下となる。勝商は捕虜のやうに粗末な扮裝、他は適宜。

あら筋 大將が勝商に城にむかつて「援けの兵はこないから早く降參しろ」

と言へ、さうしたらお前を重く用ひるというと勝商はうなづく。やがて勝商は大音聲で「城中の同志に物申す。援軍はただちに來るべし。よろしく籠城あつてしかるべし」といふ。大將大いにいかり勝商をきる。

二、無手勝流

準備 團杖とロープにて船のほねをつくり、毛布で上をつゝむ塚原卜傳とにせ豪傑、船頭、其他渡船の乘合客百姓町人等適宜に扮裝。

あら筋 にせ豪傑が一人でえばつてゐる。山賊を退治したの海賊をやつつけたの、塚原卜傳をえいつと氣合でまかしたのと大ぼらをふいてゐる。それを乘合が一生懸命きいてゐるが卜傳はいねむりしてゐるので、にせ豪傑いかり、卜傳と仕合をしようといふ。卜傳はあの島の上でといふ。島まで船がくると豪傑は先にとび上る。卜傳は船竿でぐつと船を出して「おい豪傑！とびのれるか。おれのは無手で勝つ流儀だ。おれは本者の卜傳だがお前とは仕合した事がないはいさようなら」といつて船を沖の方に出す。豪傑は島の上でどなつてたすけ

てくれと鼾音をふく。

二二、矢　作　川

準備　日吉丸が莫蓙をきて橋の上に寝てゐる。槍をもつ蜂須賀小六、他はいかめしい米俵のよろひの扮裝でつづく家來となる。

あら筋　日吉丸の足に槍尻がふれ、日吉丸はおこつて「あやまつて通れ」といふ。小六はその膽力に感心して家來にする。

二三、地　震　加　藤

準備　毛布をしいて庭先に避難してゐる秀吉に家來三四人。清正は適宜な野營地のもので具足をつくり身をかためて二三人の家來を從へてでる。

あら筋　大地震の時主人秀吉の身を思ふ清正が勘氣を蒙つてゐるにもかゝはらず、そなへよつねにのモットーを實踐してゐて、第一番に城中にはせつけ、城中の守護をなし勘氣がとかれる。

二四、石合戰

準備 德川家康、長太郎といつた少年時代、家來一人、其他は村の子供二手にわかれ石をなげるまねをしてゐる。扮裝適宜。

あら筋 阿部河原で石合戰をやつてゐるのを見て家來が家康にどちらが勝つといふと數の少ない方が勝つと答へる。初めは數の多い方が勝つてゐるが最後は一致團結してゐる數の少ない方が勝ち、家來が家康の明におどろく。

二五、加藤清正と猿

準備 一人は清正になり、他は猿、家來大勢となる。讀書の見臺、太刀かけ等用意、扮裝適宜。

あら筋 清正が習字をしてから漢書をよんでゐると、猿がまねしてゐる。やがて漢書に落書する。家來ははら〳〵して猿をしかると、清正はすて〻おけ猿も學問してゐるのだ。よいまねならなんでもしてよいが、悪いまねはしてはな

らぬといふ。

二六、木村長門守重成

準備　中央に家康左右に家來が床几にかけてならんでゐる。皆いかめしい具足（野營地のものを用ふ）木村長門はシート等を利用して長袴をつけ、社都。

あら筋　大阪冬の陣の折、木村長門が休戰の誓文をとるために茶臼山本陣に至り、血判の血がはつきりしてゐないので、自分の目の前で、家康に小指を切つて判をおさせる。

（或は山添了寛の蝿坊主の逸話も劇としては面白いだらう。）

二七、堀部安兵衛の少年時代

準備　茶店に憩ふ侍と其家來二人、旅人一人、茶店の老爺、少年安兵衛、それ〴〵適宜に扮裝、茶店に土瓶湯呑等が出してある。

あら筋　旅人が病に苦んでゐるのを通りかゝつた侍が腰の印籠から藥を出し

で興へてなほる。これを木かげて見てゐた安兵衛がこつそりとらうとして發見り、その理由をきくと、實は十年前に勘當したその侍の子安之助の愛子安兵衛であることがしれ、その侍は金と印籠をだまつて渡し親孝行せよといつて名乘をしないで別れる。

二八、村上喜劍

準備 扮裝適當。大石は皿、茶碗のころがつた中にいゝ氣持でゐること。浪人四五人いづれも亂暴さうな樣子でその中の一人が村上喜劍である。

あら筋 喜劍が大石の惰落をなげき、人非人これを食へといつて足に刺身（木の葉又はビスケット）を大石に食はせる。大石はだまつてたべる。喜劍等いかつて大石をけとばして去る。大石はそのうしろ姿に感謝し、主君の仇討を強く誓ふ。

二九、大岡裁き釜盜人

準備　社衿をつけ白扇をもつた大岡越前、その左右に家來、書役、釜盗人、小役人二三人。小役人はたすきをして團扇をもつてゐる。釜盗人はいざりで貧弱な風をして莫蘆の上に坐つてゐる。釜一個が前においてある。

あら筋　「こら！貴樣が釜を盗んだろ」と越前が訊問する。盗人は「いざりで歩くことも難儀そんな重いものはもてませぬ」といふ。「さうか。それならお前ではないな。その釜はお前のものらしい。下れッ！」といふと釜盗人よろこんで釜をかむつて下つて行くと、越前は大聲で「貴樣は先刻釜をもてぬと言つたが、もてるではないか。貴樣は釜盗人だ」といふ。釜盗人おそれ入つてしまふ。

三〇、大岡裁き子供あらそひ

準備　大岡越前、その左右に家來、書役、子供、その實の親と、にせの親。扮裝は各適宜。

あら筋　一人の子供を二人の親が自分の子だ、自分の子だとあらそつてゐる。

越前守が色々たづねてもどちらも自分の子だといふのでこまつてしまひ、どちらでも子供を中にしてひつぱり合ひ、かつたものゝ子供だといふと、二人の親が子供をひつぱり合ふ。子供は苦しいので泣き出す。實の親は子供の泣聲に驚いて手をはなす。にせの親は大喜びであるが、越前は「實の親だつたら手をはなすのが人情だ」といつて、實の親に子供をわたす。

三一、彌次郎兵衛と喜多八

準備　彌次郎兵衛、喜多八は町人の旅人姿。座頭二人、其他通行人。

あら筋　通行人がみなわらじをぬいで着物をはしよつて川を渡つて行く。しばし人通りなく彌次喜多、座頭二人あらはる。わらじをぬぐのをきらつて座頭がたがひに助け合つて渡るのにうまく背にのつて彌次が渡つてしまふ。殘された座頭がどなるので又、座頭の一人が川向ふからやつてくる。今後はうまく喜多がその背におぶさつて行く。川の中頃で殘された座頭がどなるので座頭の一人はおこつて喜多を川の眞中で投げ込む。喜多はおぼれて助けてくれといふ。

彌次は向ふ岸で一人ではらをかゝへて笑つてゐる。

三二、俵藤太秀郷

準備 りゝしい秀郷その家來、蛇の精、百足の精。蛇は成るべく白い毛布をかむつて出るとよい。百足の精は茶色の毛布を三四人でかむつて這つて出る。

あら筋 秀郷家來をつれてあらはれ、この邊に道行く人をこまらせる怪物がゐるといふから退治しようといつてゐると、蛇があらはれて「百足の爲に自分の住居をとられたから助けてくれ」と言つてたのむ。そこで秀郷は承知して尙も進んで行く。蛇はかくれて百足があらはれる。秀郷矢をうつても百足は死なずに此方へそろ〳〵すゝんでくる。そこで秀郷頭をかたむけて、すぐ合點し唾を矢につけてうつと、百足はくるひまわつて死んでしまふ。蛇の精があらはれて、秀郷に感謝して、切つても切つてもなくならぬ絹と、くんでもくんでもなくならぬ米俵と、打たないでも時を告げる鐘をくれる。

三三、鏡餅のまと

準備 飯田の長者、村人多勢。正面に岩の上に鏡餅を（白い皿でよい）かざる。岩は毛布でつくりその中にだれか一人かくれてゐて、長者が弓をうつと餅をかくし、パツと懐中電燈を瞬間點けて消す。長者は立派な服裝。村人はまち〳〵な粗末な身なり。

あら筋 長者は無益の殺生をするので村人がさかんに神罰があるといつてゐる。長者は自分は弓が上手だから鏡餅をまとにして打たうと言出し、村人の止めるのも聞かずに鏡餅を岩の上にをき射ると光がさし、長者の眼がつぶれる。村人は神の力におどろき、長者は無益の殺生をしたことを神樣におわびする。

三四、うば捨山

準備 年寄りは不用だといつて山にすてる國の殿樣、家來大勢、孝行息子。扮裝適當。

あら筋　隣りの強い國から難問題を二つ出し、とけぬと國を亡すといふ。殿様は驚いてその問題、灰の縄と、玉のまがりくねつた穴に絲を通すことの出來たものに好きな褒一をやるといふ。孝行息子はこつそり家にかくまつておいたおぢいさんからこの問題のとき方、「鹽をふくませた縄を燃すと灰の縄ができ、玉の穴の一方にみつをおいて蟻のからだに絲をむすんでおくと蟻が玉のまがりくねつた穴をとほつてみつをとりに行くから絲を通すことができる」を殿様に申上げると殿様は「どんな褒美でも與へる」といふ。孝行息子は、「年とつたお父さんを山にすてない様にして下さい。」と嘆願し、うば捨山の惡法がとり消される。

三五、一休和尚

準備　將軍家來大勢、小坊主一休。扮裝一休は白い上衣に黑いグランドシートを腰にまく。他は適宜。衝立が側においてある。木の枝、藁、毛布又は携帶テント等を利用して衝立をつくる。米俵をうまく利用してもよい。

あら筋　將軍が一休にその衝立の虎をしばれといふ。一休は鉢卷、たすきを

して繩をもらひうけてから、「將軍樣、そつちから虎をおひ出して下さい。一休がふんじまつてしまひますから」といつてためさうとした將軍がためされて、御褒美をいただく。

三六、蚊供養

準備 殿樣、家來三人。素袍冠の衣裳適宜。他は蚊になつて、三角の帽子をかむり團扶の槍でついてまわる。

あら筋 蟲を殺さぬ殿樣は、家來をつれて籔の中で蚊の爲に供養として血を吸はせるが初めはいたさをこらへて、蚊を殺す家來を叱つてゐる。が終には我慢ができなくなつて蚊征伐をはじめてつまらない慈悲心をすてゝしまふ。

三七、三人尺輪

準備 扮裝適當、主人、家來、家來の中に盲、聾、唖者がある。盜人。

あら筋 酒を好きな家來に酒庫の番をさせることをきらつて、けちんぼの主

人は酒庫の番を三人の片輪にたのみ酒好きの家來をつれて出かける。その留守中に三人の片輪が文珠の智惠をしぼつて酒庫をひらいて酒をのみ、醉つてしまふ。そのすきに泥棒がはいつて行く。さあ主人がかへつて來て見て大變だ。片輪と思つて常々あなどり留守をたのんだ主人が大損をしてしまふ。

三八、無言の災

準備　三人の僧侶は毛布で扮裝、他に小僧數名。中央に燭臺があつて、それをかこんで三人の僧がゐる。

あら筋　無言の行をしてゐると、小僧が火をつけにくる（火をつけるまねでよい）さうすると、一人の僧が「あゝ火がついた」と言ふ、他の一人が「とうゝ〳〵お前はしやべつたぞ」といふと、殘りの一人が「しやべらぬのはおれ一人だ。」といつて無言の行が一時にやぶれてしまふ。

三九、金太郎

準備 金太郎、熊、鹿、猿、兎等それ〳〵扮裝適宜。

あら筋 足柄山にて相撲のけいこ。（みんなで金太郎の歌合唱もよい）

四〇、桃太郎

準備 桃太郎、雉、猿、犬、他は鬼扮裝適宜。

あら筋 鬼が島の鬼征伐。

四一、浦島太郎

準備 浦島太郎、濱の子供、龜。扮裝適宜。龜になるものは木の枝又は竹で甲羅の輪をつくり毛布等でそれをつゝみ背に負ふて這つて出ること。浦島は腰みのをして釣竿等をもつてゐる。

あら筋 子供のいぢめる龜を買ひとり海にはなす。しばらくして龜が迎へに來て龍宮城へと案内されて行く。（あまり長くなるから、龍宮城へと出發する處までによからう）

四二、カチ〳〵山

準備 兎、狸、其他はカチ〳〵山の歌をうたふ。扮裝、兎は白い耳をつけて白いシャツを着てゐる。狸は茶色のシャツを着てそれ〳〵背板を背負つてゐる。

あら筋 山へ薪をかりにいつて兎が狸の背中に火をつけ。（火はつけるまね、又は懐中電燈を利用したらよい）狸が大やけどをして、兎が歡聲をあげる。

四三、猿蟹合戰

準備 猿、小蟹二三人、臼、蜂、卵子、扮裝適宜。

あら筋 猿がゐろりで火にあたつてゐると卵子がはじいて火傷をし、水甕へ手をつけに行くと蟹に指をはさまれ、逃げようとして蜂にさゝれ、尙外へとび出さうとして臼につぶされて、蟹が親の仇をうつ。

四四、獵師と猿

準備　獵師、親猿、子猿大勢、扮裝適宜。

あら筋　親猿を射つて我家にもちかへつた獵師が、床につくと、子猿があらはれて、ゐろりの火に手をあたためては死んだ親猿をあたためようと、つとめてゐる。眼がさめてこつそりとこの光景をみた獵師が、親猿の繩目をといてやる。子猿がよろこんで手を合せておがみ〳〵親猿をみんなでひつぱつて行く。

四五、兎と龜

準備　兎、龜、扮裝適宜。他は兎と龜の歌を合唱する。

あら筋　すでに御承知の兎と龜のマラソンに足ののろい龜が勝つお話。

四六、日と風

準備　目の神、風の神、旅人二人、他は立木になる。目の神は丸いお皿を頭にしばりつける。風の神はリュックサック又は米袋、或はテントで風の袋を背負ひ、雜囊をかむる。旅人は扮裝適當。立木は木の枝をもつて立つておる。

あら筋　風の神が日の神の前で大いに自慢してゐると向ふから旅人がやつてくる。そこで「あの旅人の上衣を脱がした方がえらいのだ」と日の神がいふ。すぐに風の神は烈風を吹かして立木がゆれにゆれるが、旅人二人は互に助け合つて上衣をぴつたりつけて歩く、風の神はやけに風を吹かすが失敗に終り、日の神が其後に温い光をあたへると、旅人は「あゝいゝお天氣になつた」といつて上衣をぬぎ一休みして日の恵みをたゝえて去り、つひに風の神は日の神にまける。

四七、鳥獣合戦

準備　かうもり、鳥、獣大勢。扮装随意。

あら筋　鳥と獣との戦争がある。鳥の方が勝ちさうになるとかうもりは僕は羽があるから鳥だから鳥の仲間に入るといひ、獣の方が勝ちさうになると僕はからだが鼠に似てゐるからと獣の仲間に入らうとするが、終ひには兩膀骨藥だといつてどちらにも相手にされなくなる。

四八、和蘭をすくつたゴルゲット

準備 少年ゴルゲット、父親、村人大勢、扮裝適宜。

あら筋 ゴルゲットがお使ひのかへり淋しい土堤をとぼると穴から水がチョロ〳〵となながれてゐるのを見付け、それをふせがうとして防せぎきれず自分の手をつきこんでゐて氣が遠くなつてしまふ。しばらくして父親はじめ村人が明りをもつてゴルゲットをさがしに來て、これを知り、この土堤がくづれると和蘭中が大洪水になるのであるから、一同ゴルゲットに感謝し、救急手段を講じその勇敢さをほめたゝえる。

四九、ウイルヘルム・テル

準備 古代のスイス風俗のこと、獵師テルとその子、惡代官、未來の王ルデンツ（この當時は惡代官に抑壓せられてゐる。）他は惡代官の家來、村人となる。

あら筋 城門にかゝつてる帽子に敬禮して通るといふ新法律を知らなかつた

テルは捕へられ悪代官の家來に許しを乞うて居ると、悪代官が行列を揃へ獵からへつて來て、テルは弓の名人だから子供の頭に林檎をのせ、これを射ろといふ。テルはそれは自分の子をころすやうなものだからと三拜九拜してわびるがゆるされず、遂に涙をふるつて起ち、林檎を射下す。村人歡呼の聲をあげる。行列中のルデンツは先程から度々悪代官にテルの救けを乞うたが一喝され、テルの成功に歡喜の聲をあげる。テルの美技に悪代官等ぼんやりしてゐる。テルはこの弓で今に悪人を亡ぼすと叫び、悪代官ちぢみ上る。

五〇、ワシントンの正直

準備　ワシントンとその友、櫻の立木、ワシントンの父、扮裝適當。

あら筋　友と遊んで居て、ワシントンは父の大切な櫻の木を斧できる。（立木をもつて立つてゐる者はこの時倒れる。）そこへ父がやつてくる友はみなにげてしまふ。父は「この木はだれがきつたか」とワシントンを叱かる。

ワシントンは「僕です。すみません」とあやまる。父は「いや大切な櫻の一

本より私の子のワシントンが嘘をつかないことがもつと大切だ。人間は嘘をついてはいけない。正面は一生の寶だ」と言つてワシントンをさとす。

五一、エ　ヂ　ソ　ン

準備・エヂソン、子供、子供の親、汽車（毛布、グランドシート等で三四人で汽車らしくみせる）

あら筋　向ふから汽車がすさまじい勢でやつてくる。子供がレールの所であそんでゐてつまづく。エヂソンはとんで行つて子供を助け、自分の足をひかれる。子供の親がとんで來てエヂソンをいたはり、禮をいふ。エヂソンは「このお子樣は前途は僕より長いから僕よりは社會に大切な人だ。それに僕は科學者になるのだから足なんかは平氣です。頭と手と意氣があればよいです。」といひ、子供の親は心から禮をのべ苦學してゐるエヂソンに學費を出す事を約束する。

五二、人殺しを見つけた話

準備　少年ロバート・ヒンヅマーシュ、犯人、警官、村人の扮裝適當、犯人は漂浪者で大きな靴をはいてゐる。

あら筋　少年が野原で一人のジプシーにあふ。ジプシーは足をなげ出して草原にすわり、何かたべてゐる。少年はそれをみてずつと進んでくると、村人が老婦の殺人事件について色々うはさしてゐる。警官が現場調査をしてゐる。少年はちよつとその場の犯人の靴跡からジプシーの靴跡に鋲の跡までにてゐることを思ひ出して警官に犯人がゐる場所をつげると警官は直ちにその方に走つて行き格闘して犯人をつかまへる。警官も村人も少年の觀察と敏捷をほめる。

五三、ズル族の少年

準備　若人、蕃人大勢、豹、立木の扮裝適當。立木になるものは毛布でもかむつては木の枝をもつて立つておればよい。

あら筋　少年が十五歳になると、蕃人が皆で頭から足まで白くぬる（これは白帽、白い運動着をつけさせる。さうして一つの楯と槍とを與へて村を追ひ出

す。もし身體の白い中にめつかつたら命がないと宣言される。少年は方々に姿をかくして白い色のはげるをまつ。或時は野の草木の何れが食用になるかを見わけ、或時は鳥をうつて（この鳥はハンカチーフをまるめてつくる）、その肉をたべ又は豹と組うちしてその毛皮で着物をつくる。色が段々はげる（これは帽子をぬぎ、毛皮等をつけ、次第に白色がとれたようにする）。かうして獨立して生活が出來るやうになつて白色がすつかりはげて歸村する。村の蕃人たちは大歡迎をして少年を一人前の若人として優遇しその種族の兵士とする。

（この劇は南アフリカ土人ズル族、スワジ族の習慣の一つである。）

五四、メーフヱキングの少年傳令

準備　ベーデン、ポウエル大佐、セシル參謀長、副官、少年傳令、扮裝隨意

少年傳令の一人は自轉車をもつてゐる（木の枝を使用してうまく車體をつくること）他は遠くで木箱又はブリキ鑵を叩き鐵砲大砲の音をたてる。

あら筋　少年傳令が郵便をもつて副官の處へくる。砲聲さかんにひびく。大

佐は「彈丸のとび交ふ中を、そんなにのりまわつてゐると、何時か彈丸が命中するかも知れないね」といつたら、少年は「隊長、私は非常にはやく走つて居ります。彈丸なんか決して追ひ付けませんよ」と答へて元氣に敬禮して去る。大佐、參謀長、副官感心する。砲聲しきり。

五五、狼心丰

準備 岩の上で大會議、狼の大將アケラ、少年モーグリ、バギラ（豹）、タバキー（豺）、シエーヤカン（虎）、其他狼になる。

岩の上にシエーヤカンがえばつてゐる。狼が其の周圍にゐる。モーグリは壺をもつて立つてゐる。

あら筋 シエーヤカンがアケラを謀つて、自分が森の大將にならうとする。狼はみなシエーヤカンに買收されてゐるのでモーグリに反對する。モーグリはアケラに育てられた人間の子である。バギラはモーグリの先生で、タバギはシエーヤカンの御機嫌とりをしてゐる腹黑の豺である。モーグリ、アケラ・バギラと

シエーヤカン、タバキ、狼との意見が對立する。モーグリはいかつて火の壺をなげてシエーヤカン等をこらしめる。（狼少年――小島政二郎譯參照）

五六、爆彈三勇士

準備 江下、作江、北川、他は敵味方に分れる。

あら筋 銃聲さかん、（木箱ブリキ鑵をたゝく）懐中電燈を點滅する。やがて三勇士は竹筒をもつてあらはれ、營火の前でたふれる。この時砲聲もりれつ、突貫の聲、進擊の怒號、敵の方しづかになる。三人はたふれてゐる。指揮官はのこされた帽子、靴をとりあげ、やゝ無言兵士一同さゝげ銃の禮敬をする。

五七、沖、横川二勇士の最後

準備 沖、横川、ロシアの將校一名兵士多勢、沖、横川はラマ僧の樣に長い袖の衣樣のものを着てゐる。他はレーンコートを着て團杖の鐵砲がよい。

あら筋 沖、横川の二人がとらへられ、ロシア兵にかためられてあらはれ

る。銃殺の前に、ロシアの將校は「遺言がないか」と云ふ。横川は「自分の錢をロシアの赤十字に寄附してくれ」といふ。將校は「お國へ送りませうか」と問ふ。横川は「天皇陛下は我らの家族を見殺になさいません」と答へる。沖は「目かくしをとつてくれ、自分は自分の死ぬのを見たい」といふので、ロシアの將校は目かくしをとる。横川は「沖！　君とおれとは國家の事を論ずるのにも、なんでもすべて意見があつたがただ一つ合はなかつたものがある。それは宗教の問題だ。しかしそれも君の遺言でよく知ることが出來た」といひおはらぬうちに沖は「じつはおれはさう言はうと思つてゐたところだ。君のキリスト教とおれの禪宗もその極地は一つだつた。」といふ。

ロシアの將校は兵士に「用意！」「うてー」といふ。銃聲とどろき二勇士たふれ、ロシアの將校は「さゝげ銃」と號令する。しばし默禱。

五八、義人呉鳳

準備　呉鳳、蕃人大勢、馬、扮裝適宜、馬は健兒二名で毛布を用ひ適當に作る。

あら筋　蕃人がさわいでゐる。人の首をとらないから天氣がわるく作物がとれないといきまく。吳鳳はなぐさめるが、蕃人はきかない。仕方なく、明日こゝを白い衣をきて馬にのつて人が通るから打てといふ。蕃人たちは吳鳳大人の言葉によろこぶ。互に分れて、蕃人は弓矢等色々準備をしてゐる。吳鳳は一度場外に退き馬にのり白い衣を頭からかむつてあらはれる。

蕃人たちは「とう〳〵朝になつた。まちどほい一晩だつた。おや向ふから吳鳳大人の言つたようにくるぞ」「さあ打たう」と姿をかくしてその白衣の男を打つ、白衣の男は馬から落ちる。蕃人共喚聲をあげてあつまり、白い衣をとると吳鳳であるので、おどろく。一同天の神にけつして人を殺さないと誓ふ。

五九、白虎隊

準備　全員白虎隊士となる。その扮裝適宜。

あら筋　全員傷ついてあらはれる。はるかに營火の向ふ側をみて、お城にも火がまわつたぞ。今はこれまでと割腹の用意、朗々たる正氣の歌が吟ぜられる

いざさらばと皆それ〴〵に自害する。

六〇、道臣命

準備 道臣命の一行、先導八咫烏、兄猾、弟猾、夫々自由扮裝。命は弓をもつ。

あら筋 道臣命の一行が八咫烏の先導ですゝんでくると、弟猾がやつて來て兄の悪いたくらみをつげ、許を乞うて家來となる。一行尙すゝんで行くと兄猾のところにくる。兄猾は命を迎へて云ふ樣には「神大和磐余彦尊樣のために特に新しい御殿をつくつておまちしてゐました」といふ。命は弟猾の言葉でそれがつり天井であることを知つてゐるので案内しろといふ。そして兄猾に「さきに入つてみよ」といふ。兄猾は「尊樣の御入りにならない前に入るのはもつたいない」等といつて入らうとしない。そこで命は劍に手をかけるので兄猾はおどろいて御殿に入ると同時に天井がくづれて兄猾が死ぬ。(御殿は天幕でかんたんにつくつてもよいが。なくてもよい)一同ぱらぱらぜんとして之をながめて

ある。命はしばし頭を下げて默想のてい。しばしして進軍の命令を下す。

附記　詳細なる營火　精選劇集　は改めて單行本として他の機會に發表したいと思つてある。（筆者）

少年團文庫

第一輯 班の野營法
定價二十錢 送料四錢

第二輯 ハイキング讀本
定價二十錢 送料四錢

第三輯 營火の仕方
（附）營火劇集
定價二十錢 送料四錢

第四輯 閑時作業
定價二十錢 送料四錢

昭和八年八月三十日 印刷納本
昭和八年九月三日 第一版發行

少年團文庫第三輯
營火の仕方
定價二十錢

著者 吉川哲雄
東京市京橋區西八丁堀四丁目八番地
發行人 米本卯吉
東京市芝區田村町五丁目十二番地
印刷人 佐藤幹太郎
東京市芝區田村町五丁目七番地
印刷所 鎌倉印刷社

版權所有

發行所
東京市麴町區丸ノ内二丁目一番地
少年團日本聯盟需品部
電話丸ノ内（23）一六六二番
振替東京七一五九一番

少年團日本聯盟需品部

發行